近愛文書 ⑧

おやさと研究所員
安井　幹夫　*Mikio Yasui*

12　仝日御授事運ふ事情御願　（注）10～12は一連のもの。Aでは、「日々さづけの事に付願」とある。
さあ〳〵尋ぬる処〳〵　皆こふして　よりていれバみな信実ばかり　とんな指図した処が心迄　一寸いかん　二日三日でいこふまい　一寸事情さとしたる　一日の日もつて　皆一ツの里に里がそゑんといふ里をきかして受取　時たけ　さかん〳〵といふハ　道をおさへて　さかんとゆへよまい　里にあ□せる　そふやない　とんな処へ〳〵においかゝるも　神かはたらくからかゝる　なか〳〵のはたらきゆふ迄やない　でるやいな　あぶなき処でもし」（53ウ）
ゆごふするでとをれる　とこそこへにをいかゝりたとゆふハ　皆な神のしゆごふ　とんな処とをりて　あふなき処　こわき処でも　長々の利益なくバとをられやせん　のかれてきた処　一寸ののかれる事てきやせん　かたきの中　てきの中　つるぎの中も　つれてとをるも　同し事といふ
　しばらくして
さあ〳〵皆とりおさへてある処あろふ　われも〳〵処〳〵国々はやくせく処　とめおいたる処あろふ　よふきゝわけ」（54オ）
百人の中に九十人迄　こゝろありて　あと十人あわん　九十九人の中　一人でもせいしんあれバ　おさめさす　そふとふ　はなしておこふ　これから一ツの道はこふなら　三年三年〳〵の中に　すみやかの道をみせるほどに　けふのたすね〳〵　あと〳〵せきがこふとゆへバ　せきにまかせおく　席一席とゆや一席　二席とゆや二席　けふにも、こふとゆへハこふに　又事情はこんでやるかよい」（54ウ）
（55オ・ウ）1丁分白紙

13　明治廿六年十月十七日
さあ〳〵たすねる処　尋るであろふ　よふ是迄噺したる処　一時てゝ尋るやあろふまい　一時むつかしいとさとししたる　何もむつかしいやない　一時もはやく時上　あらため　何も一時あらためるやない　薬を以テなをしてやると云ふない　みやくをとりてたすけるやない　医師ノ手あまりをたすけるが第といふ　なれど一口ニはなしする」（56オ）
きく　一ツにわしやまになる　ほつてをけんと云ふ　よふきゝわけ　何てもなけれバ何でもない　身上心ゑと云ふハ　そりやとゆふ里をさとしたる　みなさとしたる　人を腹立てますやない　ぜん〳〵古き咄し　人のぎりを立て　神の里をかいてハ神の道とゆへよまい　くわしい噺しをしてをこふ　所々かわろまい　一時あらためて　医師ニかゝらねばならんといへバ　又とをゝ思ふ」（56ウ）
はしつする　よふきいてをかねバならん　今ノ一時とろ海世上さとす里　ほつてをいてわならん　こゝらにわ　どふゆふものハあろふまい　なれともと〳〵千ニ一ツてもあつてハ　道のきず　おしへノ里になき里である　医師ノ手あまりとゆゑバ　すてものとうよふてある　それをたすけるがおしへノだいと云ふよふきゝわけるよふ
　奈良県一般ニ派出して最早教」（57オ）
　導職を集めて咄しを伝へる事
さあ〳〵所々　みなそれ〳〵にはこぶ処　せんよりさとしたる咄し　一時にこふとゆへバ　あと〳〵と云ふ　今の処とをかこふがゞむつかしい　所々里ををさめたる所にてハ　よむやなかろふなれど　よふちよい〳〵うわさをきく　それでハ道の里とわゆわん　おんしよ一ツノ里を以てさとすよふ
　前川宮森永尾喜多様四名手」（57ウ）
　分して二人宛大和巡回の事
さあ〳〵あちらこちらへでこして　はなしゆるしおくによつて咄しがむつかしいで　一時あらためるといへば　是迄の里がどうもならん　こふゆふ事ハあろふまい　なれと万に一ツでもありてハなろふまい　なれとかれこれの風説をきく　万人の内一人でもありてハなろふまいといふ事情を以テさとすよふ
　他国分支教会長本部へ招集する事」（58オ）
さあ〳〵一寸けんきゆのため　先〳〵と云ふ　とおい処ハくわしいものわない　教のたい　すてもの　ほかしもの　一ツの里を助けるなら　どこからうらまれる事いらん　なれとめへ〳〵てからしよ〳〵でハどおもならん　はやくいさんてはこぶ事上ハ受取　よふきゝわけてくれるよふ
さあ〳〵処々はやくしつかりとはなしてくれ　くどふくとふ里にさとし」（58ウ）
おく　もしやありてハ　とをもならんといふ里をさとしてくれ何ともないよふな事か　大へんむつかしい

14　明治廿六年十月十六日午前三時四十分刻限ノ噺し
　（注）明治26年10月5日　朝3時40分　刻限御話
いつまで〳〵いた処がとをもならん　なんにもたのしみかない〳〵　とんな事かわるやわからん　たのしみかありやこそ　いたかいかある　せつ角のたのしミかたのしみになるまい　一から十迄の処かきとらして　しばらくと云ふよふなもの」（59オ）
さんねんなハ　つきそふものもつきそふもの　たのしみさしてこそ　そばなもの　一寸処とふもならん　けふの日　道もおなじ事　心もおなし事　一寸ぢいとして　なんぼいてもおなじ事ほんの日々くかますよふなもの　あす日立帰り　たんのふさしてこそ　つきそい　あんぜるもむりわない　しばらくの処　しんぼしてくれ〳〵
　（注）改行もせず、引き続いてお言葉が記されているが、それはおそらく、明治26年10月5日（陰暦8月26日）「この日政甚小夫へ行って帰りに初瀬へ行きその時帰りて本席より政甚に説諭せられし御話」であろう。続いて翻刻しておこう。
おまいわ戸主になりているから　戸主のものや　なれバどこへなりと出ていくから　此里」（59ウ）
をわけてこい　何をさとしていくのやらわからん　よるひるの里かわからにや　しきよふでゝゆくかよい　此屋敷にわ五十そこ〳〵の年とりていれど　それたけのあほわないぞ　おまへ世界なみのこふけだせバ　おれバとこへなりと　てゞゆく　ゆを〳〵おもていた処や　おまへらてハ　一寸さきみゑまい　みゑるよるひるとの里をわけ　よるひると云ふわ　よるひるおし事でハ　道をよる　行ハとをれ」（60オ）
るか　しやんしてミよ